

第40回「東書教育賞」の 審査を終えて

審査委員長 市川 伸一



2024年度、東書教育賞は第40回という節目を迎えました。その記念すべき年に、例年にも増して多くの応募をいただき、審査委員一同、たいへんうれしく思っております。

今回は、特に第40回を記念して、従来の最優秀賞、優秀賞、奨励賞に加えて、「特別記念賞」を設けることといたしました。その選定にあたっては、今回の応募論文が優れたものであることはもちろんですが、この10年間に他の論文も応募なさっていて、それもまた優れていたという実績を加味して選ばせていただきました。

東書教育賞は、「未来を担う子どもと共に歩む確かな教育実践」という大きなテーマを掲げております。このテーマにふさわしい、現在そして未来の教育課題を踏まえた幅広い領域の論文が寄せられました。

いくつかの例を挙げさせていただきますと、小学校の部で優秀賞を受賞された、愛知県豊橋市立富士見小学校の水流卓哉先生の論文は、タイトルが「自治的、自発的な学級文化の創造」、副題が「3つの学級活動を柱として」というものです。3つの学級活動とは、年間計画をもとに設定された学級会、当番活動、認め合い活動のことですが、これらを通じて、自主的に話し合って合意形成や意思決定をしていく子供たちの姿が描かれています。学年末に児童たちが作る「先生に対する通知表」では、「授業はいつもわかり

やすくてもおもしろいからA判定。でも、学級活動はだんだん先生が教えてくれなくなって自分たちでやったからC判定だよ」というほほえましいエピソードがあります。

中学校の部の最優秀賞は、愛知県岡崎市立福岡中学校の永田祐己先生の「集団での給食活動における個別最適な栄養摂取を目指した取組」という論文です。給食で配膳されるご飯の量は一律であることが多いものですが、一定量を完食させるのも、一見残菜はないが友だちに譲って不足や過剰な摂取が起こっているのも、健康的とは言えません。本来であれば、体の大きさ、活動、成長などを考慮して自分にとって最適な量を摂取すべきものです。栄養教諭である永田先生は、家庭科や学級活動の時間を使って、食事の適量について説明した上で、給食の時間には各自が自分で算出した量に基づいて計量して食事をとるようにしました。限定された期間の実践であっても、適量に関する生徒の意識や行動が変化したことが記録やアンケートからも見て取れました。

中学校の部は、滋賀県湖南市立甲西北中学校の山口朋久先生の「誰もができる 英語授業内多読 読める!楽しい!世界に!」という論文が優秀賞を受賞されています。近年、多読・速読の重要性が指摘されていますが、基礎的な文

法や語彙の知識をある程度身に付けた中学3年生に対して、授業のはじめの10分間をイギリスの絵本を多読する時間にあてています。生徒たちは読む速さや内容理解テストの結果を記録していきます。5か月ほどの間に、理解度を考慮した読む速度の数値は大きな上昇を見せ、英語実力テストの得点も向上したと言います。授業内での英語活動とも結びつけることによって、4技能全体が向上し、英語についての関心・意欲が高まったことが行動の変化やアンケート結果から見て取

れる実践報告になっています。

これらの事例にもありますように、これからの新しい教育の方向性を示すような工夫が盛り込まれ、その効果検証まで含めた優れた実践が多く見られました。これからの東書教育賞の指針にもなると思われれます。また、お読みになった先生方の今後の実践にもぜひ活かしていただけることを期待する次第です。受賞された方々、おめでとうございます。また、ありがとうございました。

ICTに関わる 論文の総評

審査委員 赤堀 侃司



ICT部門の審査を担当致しました赤堀侃司と申します。ICT部門では小学校では3編の論文が受賞され、中学校では2編の論文が受賞されました。以下それぞれの内容について講評をさせていただきます。

まず小学校の優秀賞は、福井県坂井市立平章小学校の川端康誉先生が受賞されました。論文題名は、「地域との協働によるエージェンシーの育成」です。このエージェンシーという言葉はOECDの2030年の教育の在り方の中の提言で出てきた言葉ですが、当事者とか主体的な活動などの意味で用いられております。

この論文を読むと、まさにエージェンシーとはこのことかと思うような実践が展開されておりました。坂井市には有名な丸岡城があります。「一筆

啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」という日本一短い手紙として有名ですが、この丸岡城を中心として坂井市の地域おこしを、小学生で盛り上げようとするプロジェクトを発足したのです。つまりエージェンシーそのものなのです。

企画をするにはテーマを決めなければなりません。テーマを決めたらどのように1年間で実践するか、つまりロードマップを作らなければなりません。これは大人のプロジェクトそのものです。そのためには子供たちだけでは無理なので、まちづくり協議会や公民館や市役所、そして観光ボランティアの人たちを巻き込んで、一大イベントを行ったのです。実はこのイベント当日は雨だったのです。雨は予定にはなかったので、次回には天候も考慮に入れて企画をしようということに

なりました。つまり大人と同じように、PDCAサイクルを実際に行ったのです。

市民の皆さんに知ってもらうためにはCMを作らなければなりません。そのCMは動画アプリで作りました。また坂井市の自然を紹介するために、パワーポイントで植物クイズを作りました。このように目的があって道具を使うというスタイルが大変自然なので、審査員の私たちの気持ちにスッと入ってきました。

この論文を読むと、子供たちの姿が目の前に浮かぶようで、感銘を受けました。これが優秀賞になった理由です。おめでとうございます。

次に、小学校特別記念賞は、兵庫県神戸市立若草小学校の久保田智子先生が受賞されました。

論文題名は、「児童と創る振り返りの手引き『めざせ!ふり返りの最上級者』活用」です。久保田先生は、昨年も論文を出されて、しかも大変優れた内容でした。そこで連続して高く評価されたので、今回は特別記念賞に決めさせていただきました。

なんといってもこの研究は、デジタルの特徴を十分に生かしていることです。図工なので、子供たちが作品を作りますが、作品を作るときには、作りながら刻一刻と見方考え方が変わっていくのです。それは私たちも、よく経験することで、瞬間瞬間に自分の考えや感じ方が変わってくる、つまり私たちは作品と自己対話していると言ってもいいのです。そのプロセスをデジタルとして残したい、つまり振り返りなのですが、この振り返りは1時間の授業が終わった後だけではなく、そのプロセスの中で振り返る、まさにその瞬間の写真を撮り、コメントを書いて振り返るという実践が、実に素晴らしく、審査員の私たちに大きな感銘を与えました。以上が特別記念賞の理由です。おめでとうございます。

次に小学校奨励賞を受賞されたのは、新潟県上越市立有田小学校の田中行人先生です。論

文題名は、「生活科実践における『児童と飼育動物が共に生活する場』の可能性」です。

この実践は生活科の中で、子供たちがポニー、つまり小型の馬なのですが、この馬を飼育するわけです。そして飼育する場所も、築山という小高い広場にして、材木店に行って、その周りに柵を作るのも子供たちが行いました。その実践の中で、子供たちの心に、動物への愛着が育っていくわけですが、その心の変容過程をテキストマイニングというアプリを使って、見事に分析されたという実践です。奨励賞の受賞、おめでとうございます。

次に中学校の受賞に移ります。特別記念賞を受賞されたのは、上越教育大学附属中学校の岩船尚貴先生です。論文題名は、「近代文学作品の魅力をも主体的に追究する学習者の学びの姿」です。

題名にありますように、近代文学作品、ここでは上越市の出身である児童文学作家、小川未明の作品を取り上げています。生徒たちがこの作品を読んで、いろいろな視点から話し合うのですが、その方法として、自己調整振り返りシートやビブリオバトル形式で作品の魅力を討論するゲームなどを取り入れていました。そのために、プレゼンテーションアプリやホワイトボード、生徒の考えを共有するアプリなどを充分活用したところも効果を生み出していました。その結果、生徒たちは、人の優しさだけでなく、エゴイズムや欲望なども取り上げて、自分との対比において内容を深く理解するようになったと、分析していました。中学生が文学作品をテーマにして、深い学びにつながったことが評価されて、特別記念賞に輝きました。受賞、おめでとうございます。

次に中学校の奨励賞を受賞されたのは、岡山県早島町立早島中学校の長嶺翔太先生です。論文題名は、「特別支援学級におけるICTを活用したUDL数学科授業の実践」です。

長嶺先生は、特にデジタルドリル教材を用いて

特別支援学級の子供たちが学びやすいような授業設計をされました。その結果、学習進度が遅い子も授業に参加することが困難な子供たちも、それを乗り越えることができました。その基本はユニバーサルデザインですが、そのことは特別支援学級だけでなく、すべての子供たちにとって極めて大切な考えであると思います。そのことが評価されて、奨励賞に選ばれました。おめでとうございます。

以上の受賞された論文を読んで思うことは、2つあります。1つは、子供たちが主体になるということです。子供たちが中心になって地域の町おこしや、子供たち独自の作品作りや、動物を飼育して自分たちが成長していく姿などすべて、先生から指示されたとおりではなく、子供たち自らが作り出していく活動です。それは私たちにこれからの授業のあり方を示唆してくれています。

もう1つは、ICTの活用です。受賞作品を読むと、これまでの教師と子供たちの関係から、そこにICTの道具が加わった、人と道具の3つの関係において、授業を作り出しているように思いました。これからは生成AIなども活用しながら、未来の授業に向かっていくと思います。受賞された皆さん、おめでとうございます。

審査委員

鹿毛 雅治



受賞された先生方、誠におめでとうございます。審査を担当させていただきました鹿毛雅治と申します。

生成AIに代表されるテクノロジーが今後の社会を変えていくことが明らかな今日、むしろ生身の教師が対面で教えるという学校教育の土台や存在意義についてあらためて認識することがわれわれに求められています。まさに学校における教師はいかにあるべきかという教師の「質」が鋭く問われているのだと思います。そのような中で今回も東書教育賞の審査を担当させていただきました。人間教師として目の前の子供たちに向き合い、彼らの人としての学びや成長を促すことを目指して、多様な教育実践研究が主体的に行われていることを確認することができ、大変心強く思った次第です。実践を創り出すこのような教師の主体的で創造的な姿勢こそ、これからの教育界にますます求められているのだと再認識いたしました。

私からは、3つの入賞論文についてコメントを申し述べたいと存じます。

まず、小学校の部で奨励賞を受賞された福岡県立小倉聴覚特別支援学校・恒成尚江先生の論文についてです。特別支援学校（聴覚障害）における生活単元学習の授業づくり研修という具体的な研究テーマを設定し、教師主体で授業をデザインすることを重視した研修のあり方の重要性を描き出す意義深い論文です。心理的安全性

を重視した支援者の心構えを中核に据えつつ、D-OODAループに基づいて授業づくりを支援した知見をもとに「生活単元学習の授業づくりの手引」を編集し、さらにその手引を活用した授業づくり研修を実施して、その効果を確かめています。特別支援学校に特有な状況に即した教員研修の実践研究であり、現場の実態を踏まえたきめ細かい検討を経て、手引が開発されている点、組織的な取り組みが意識されている点、研修を通じた教師の認知的かつ情動的な変容に着目している点、そして何よりも教師の主体性を重視している点で意義深いと感じた次第です。

次に、小学校の部で奨励賞を受賞された広島大学附属三原小学校・松林泰弘先生の論文についてです。子供たちが政治に無関心であるという問題意識に基づいて、市議会議員、児童会の元会長、選挙管理委員といった政治の当事者との出会いに重点を置いた実践をまとめた研究であり、初等教育段階における政治教育の極めて意義深い実践事例だと感じました。特に、子供たちの政治に対する当事者性を高めることを目指して、子供たち自らの問いを重視するとともに、「本物」とのリアルな出会いを核としつつ、自分たちの願いを「醸成」するプロセスを大切に、具体的な改善案の提案という表現活動へとつなげていく一連の問題解決プロセスを繰り返す学習展開は大変示唆的です。

最後に、中学校の部で特別記念賞を受賞された岡山大学教育学部附属中学校・川上祥子先生の論文についてです。中学校家庭科において「個のウェルビーイングと多様性」をテーマとして掲げ、「LGBTの家族」を具体的な題材として取り上げることによって、互いの生き方を認め合い、受け入れ合う多様性を尊重する風土が育まれることを目指した意義深い実践研究です。明確な問題意識のもとでの一連の取り組みの結果、生徒が多様な家族のあり方を受け入れるとともに、高齢者や幼児、外国人など地域の多様な人々への理解が広がるなどの成果がありました。とりわけ、ジェンダーの観点から実生活に潜む多

様なアンコンシャスバイアスについて取り上げるなど、家庭科の教科指導にとどまらない広い視野によって取り組まれた複数の単元開発を含むダイナミックな実践だと感じました。

以上の3名の先生方を含め、東書教育賞を受賞された皆様のみならずのご活躍を祈念するとともに、全国各地の先生方の創意に満ちた実践がますます活発に展開していくことを心から願っております。

審査委員

高山 実佐



この度、受賞された先生方、誠にありがとうございます。学校現場での日々のご実践をこのような素晴らしい形でおまとめになり、東書教育賞を受賞されましたこと、心よりお祝い申し上げます。審査をいたしました高山実佐と申します。私より次の3点の論文につきまして選評と所感を述べさせていただきます。

まず、優秀賞の大阪府高槻市立樫田小学校、西村大樹先生の「防災宿泊行事を通して、学校・地域の活力を高める」についてです。全校児童53名の学校や地域の課題を、さまざまな関わりをもつ「関係人口」の増加を目指すことにより解決を図ろうとしたものでした。地域との連携をもとに多くのゲストティーチャーを招いた、これまでの行事を踏まえています。保護者や地域施設の関係者・市の行政機関の協力を得つつ、今回は

大学生も参加した2日間の防災サマースクールの取り組みから、多くの学びが得られていたことが印象的でした。市民防災協議会や大学生が中心となり企画・実施した、防災カルタや備蓄倉庫活用ワークショップなどの防災学習、危険・被害箇所チェック、避難所でできるレクリエーションなど、学習と体験が組み合わせられた多彩な活動があります。その中でも7つのワークショップとして、防災スリッパ、ポトル、簡易ランプなどを作成したり、ロープワークや応急手当などを学んだりできる活動や、一人ひとりが被災時の行動を計画した「マイ・タイムライン」の作成などは、災害時を具体的にイメージし、取り組めるものとなっています。防災に対して、児童が意識できるだけでなく保護者や地域住民も改めて自分の問題として捉えられるようになり、学校の避難所としての役割も改めて確認されています。大学生との協働による、児童と大学生とのコミュニケーションや地域との良好な関係性など、今後、一般化も可能な、意義深い実践でした。

次は、奨励賞受賞の石川県白山市立明光小学校、田中哲也先生の「持続可能な社会の担い手となる資質・能力を育む総合的な学習」についてです。金沢市の課題について多様な視点から自身の考えをもち、解決のための取り組みまで行った総合的な学習の時間の実践でした。まず、金沢の魅力を知るために兼六園や金沢城で観光客へのインタビューを行い、次に、地域の人の問題意識を知るためにひがし茶屋街、近江町市場で地域の人へのインタビューを行います。その調査結果を整理することにより、観光客への否定的な見方が多くを占めますが、観光客増加を目指す市役所観光政策課の話を聴き、社会全体を考える視点を学びます。最終的に、地域の人にも観光客にも魅力的な金沢にするためのプロジェクトとしてポスターやチラシを作成しました。インタビューの整理や市役所の方針の理解、課題解決のための活動には社会科・国語科・算数科との教科横断的なカリキュラムが活かれています。体験を重ねた児童が多面的、総合的に地域

を捉え、自らが課題を見出し、その解決を考え行動する、主体的な学習が印象的でした。

最後も奨励賞受賞の、大阪府立久米田高等学校の重野金美先生が前任校の岬町立岬中学校で行った「子ども・教職員・地域をつなぐ外国語科プロジェクト型学習」についてです。英語学習の意義・必要性を感じ取ることで、地域への理解とつながりの強化、生徒の自己効力感を高めることを目的にした、オリジナリティのある実践でした。過疎化の進む地域に外国人観光客を招くために産業観光促進課と連携し、地域の事業者インタビューを行い、その魅力を伝える英語のポスターを作成し、ホームページやインスタグラムを通して世界に発信するというプロジェクトです。英語学習の中ではポスター作成を軸にして学習内容の意義づけや知識・表現、振り返りを考察し、国語科でのインタビューに関する知識や技能を活かして事業者と直接話を聴き、ポスターを作成します。中間発表を設け、英語の使い方の的確性と外国人観光客を誘致する可能性との観点から生徒同士、教職員がコメントをつけ合い、改訂した後、完成させています。地域の探究的な学習と英語学習とを関連させた貴重な学習でした。

いずれも先生方の教育課題に即して、児童・生徒が体験の中から課題を見出し、他者との協働を通して自らが考え、生き生きと行動している姿が想像できる実践でした。さらなる充実とした実践の広がりを心より願っております。

審査委員

武内 清



審査に関わらせていただいた武内と申します。最初に審査で高く評価される論文の特質を3つほど申し上げます。

1つ目は、一般的なことですが、高く評価される論文に共通性があります。優れた実践である、創意工夫がある、児童生徒の発達段階を考慮している、他の教員や学校のモデルになる、論文として整っているの5点です。

2つ目は、現代の教育課題を意識している論文です。今の時代の教育は、アクティブラーニング、つまり「主体的・対話的で深い学び」、児童生徒の多様性に対応した個別化教育、教科横断的で、社会とのつながりのある実践です。

3つ目は、単なる思いや仮説ではなく、データで実証されているということです。

以上の3つの観点からして、優れた論文として評価されたものの1つは、中学校部門で最優秀賞を受賞された愛知県岡崎市立福岡中学校の永田祐己先生の「集団での給食活動における個別最適な栄養摂取を目指した取組」です。栄養教諭による中学生の学校給食の生徒個人の適量に関する研究であり、個人の必要なカロリーの計算をすることから始め、生徒のご飯摂取量の過不足を、実際のご飯の量と生徒の意識も含め、データで検証したもので、他校でもモデルにできる、優れた実践です。

小学校部門で優秀賞を受賞された愛知県豊橋市立富士見小学校の水流卓哉先生の「自治的、

自発的な学級文化の創造～3つの学級活動を柱として～」も優れた実践です。教師が学級活動を計画し児童に提案したものが、児童主体の学級活動に変化していく様子が、時間を追って正確に記述されています。児童が自治的、自発的な学級文化を生み出す実践です。

さらに、中学校部門で奨励賞を受賞された大阪府立久米田高等学校の重野金美先生の「子ども・教職員・地域をつなぐ外国語科プロジェクト型学習」です。過疎化している町(岬町)を盛り上げるプロジェクトを考え、外国人が訪れてくれるような英語のポスター作りを、生徒が町の行政とともにやり、英語の学習が地域の将来に結びつくという実践の報告です。国語科(国語の授業)との連携もある優れたものです。

これらの実践研究がモデルになり、日本の授業がさらに発展するものと思われます。受賞された先生方、おめでとうございます。

審査委員

種村 明頼



受賞された先生方、誠にありがとうございます。審査員の種村明頼です。現在の学習指導要領に基づいた教育課程編成・実施も折り返し地点に来ており、各学校の取組は地に足の着いた実践になってきているところです。そのような中、今回、提出された論文は、より質の高い教育活動を推進するための一助になると思いました。

はじめに、提出された論文全体についての講評をさせていただきます。論文の切り口が、現在の学習指導要領で重要視している「育成を目指す資質・能力」を明確にした教育課程の視点からまとめられたもの、学校安全、特別支援教育、ICT教育、LGBTQの教育などの現代の教育課題と向き合い実践したもの、先行研究をベースに自分の学校や地域の実態に即し、授業改善を図ったもの、などの様々な視点からの実践論文でした。どの学校でも抱えている課題であり、どの学校でも参考となる有効な解決策が示されていました。また、昨年12月末に次の学習指導要領に向け、中央教育審議会に諮問がありました。その内容にも絡むものがあり、改めて論文の質の高さが伺えました。

次に、3点の論文について、講評をさせていただきます。1つ目は、優秀賞の大阪府高槻市立檜田小学校の西村大樹先生の「防災宿泊行事を通して、学校・地域の活力を高める」についてです。令和4年3月に閣議決定された第3次学校安全の推進に関する計画に「地域の多様な主体と密接に連携・協働し、子供の視点を加えた安全対策を推進する」や「地域の災害リスクを踏まえた実践的な防災教育・訓練を実施する」などの課題が示されています。檜田地区の災害リスクを踏まえると、避難所設置及び防災宿泊の視点はとても重要となりますが、この取組内容はとても充実していました。防災宿泊訓練をテーマにし、学校、高槻市、地域住民、保護者、大学生と連携した活動（防災サマースクール）で実践されました。計画段階から、多くの方が関わり、児童のみならず、関わった人が防災に対し自分事として深めることができるようになっていました。また、大学生等による7つのブースによる体験活動は地域や保護者の防災への関心等をより高める取組にもなっていました。

2つ目は、奨励賞の石川県白山市立明光小学校の田中哲也先生の「持続可能な社会の担い手となる資質・能力を育む総合的な学習」についてです。地域の実情を踏まえたSDGsの目標

11・目標17とESDを軸とした授業実践を通して、持続可能な社会の担い手となる資質・能力を「多面的、総合的に考える力」として取り組んだ実践でした。「金沢の魅力は何か？」の観光客へのインタビュー調査から授業は始まり、その調査結果を分析することにより、多面的な視点に気づかせ、そして、「魅力的な金沢市にしたい」の学習課題へと導かせるなど、課題解決型の単元構成になっています。また、単元目標、育成したい資質・能力とSDGs・ESDとの関連性を明確にした評価計画の工夫にも配慮されています。授業後の児童の感想も多面的で具体的であり、この授業実践のよさが伝わってきました。

3つ目は、特別記念賞の岡山大学教育学部附属中学校の川上祥子先生の「個のウェルビーイングと多様性を高める中学校家庭科の授業実践」についてです。具体的には、実生活にあるアンコンシャスバイアスの写真やイラスト、LGBTに関わる事例等からパフォーマンス課題を出させ、多様性等や個のウェルビーイングについて考えていく授業構成となっています。論文の内容が具体的で分かりやすく、生徒の意識の変容もよく理解できました。同性婚についても、他国との比較、社会科で学んだ法律や権利などの側面から考えられる生徒が出ており、この授業の質の高さが伺えました。

以上簡単ですが、私からの講評とさせていただきます。

審査委員

東原 義訓



受賞された先生方、おめでとうございます。

私からは、ICTを活用した実践研究について触れさせていただきます。

小学校部門の優秀賞に輝かれた川端康誉先生は、OECDのラーニングコンパスで示されたエージェンシーと呼ばれる「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」を伸ばすために、地域を実践の基盤とした2年間にわたる長期的なプロジェクトを実践されました。

地域の方の協力を得つつ、児童全体が主体的に動けるように組織を構成し、チームリーダーからなる実行委員会を上手く機能させることによって、多くを児童に任せる体制を作られました。

ICTは自分たちの活用のニーズから自由に選択されて、アンケートツール、プログラミング、パワーディレクター、イラストレーターなど、高度な活用も見られました。当たり前のように、自然な形でICTが活用される時代になったことを強く印象づけてくれた素晴らしい児童たちでした。

第39回に奨励賞を受賞された久保田智子先生は、その後も実践研究を発展的に継続し、再び東書教育賞に挑戦されました。見事な実践であることから、特別記念賞が贈られることになりました。

図画工作の領域でのデジタルポートフォリオと

も言える実践をなさっていただきましたが、振り返りの質を向上させるための工夫が素晴らしいものでした。どのような振り返りの内容なら図工の学びを深めるのかを考えさせ、振り返りの質にはレベルがあること、そのレベルの向上を児童に意識させる仕組みを工夫されました。

レベル分けの根拠は児童には伝えないで気づかせることを大切にされた実践でした。

「振り返りを生かして、次をどう行動するかを考える」とか「どんなところが自分らしいのか見つけることが図工だと思うから振り返りが大事」など、振り返りの意義に児童自らが気づくことのできた素晴らしい実践でした。

次は中学校部門の特別記念賞の岩船尚貴先生の実践についてです。

文学作品の魅力を追及し、読みを深めるプロセスでICTを巧みに活用した実践でした。

たとえば、作品の魅力を紹介するブックトークではプレゼンテーションアプリ Keynote、その聞き手の評価には Googleフォームが活用され、単元末の「小川未明を読む意義」を考える活動では、ホワイトボードアプリ Jamboard や、意見集約アプリ Mentimeter を用いて生徒の考えが共有されました。生徒が制作した動画の共有のため活用されたツールはPadletでした。

このようなクラウドを基盤としたICTの活用は、読書が個人の内に留まったものではなく、読者同士がその読みを影響させ合うという、ソーシャルな読みの深まりに導きました。この点が特に優れた実践といえ、新しい読書方法を提案するものでもありました。

以上、いずれの実践も、もはやクラウド基盤のICT環境が当たり前の学習環境であることを示す教育実践でした。受賞された先生方、おめでとうございます。

審査委員

藤井 齊亮



審査員の藤井齊亮です。

まず、全体的な印象を述べます。

今年の論文は、過去5年間の応募数と比べると、小学校が約3割増しで、先生方の積極性を感じ取ることができました。中学校は例年並みの応募数でしたが、どの論文も質的に充実している印象がありました。

さて、私は次の3つの論文について講評と感想を述べます。

まず、小学校部門で奨励賞を受賞された、広島大学附属三原小学校・松林泰弘先生の「政治をもっと身近に～『本物』との出会いを通して～」についてです。

具体的には、第6学年の社会科政治分野を対象にした、3単元（6，12，2月）で構成される実践です。その特徴は、子ども達の政治への当事者性を高めるために、政治に関わる人と直接触れ合う機会を設けた点にあります。実際、子ども達は授業の中で、市議会議員、自伸会（児童会）元会長、そして市の選挙管理委員に出会い、その出会いによって得られた学びの内実が本実践の成果となっています。政治への当事者性を高めることに着目し、実践の成果を子ども達自身の言葉から丁寧にまとめた点や年間を通した単元設定に工夫がみられる点などが評価されました。

次は、中学校部門で優秀賞を受賞された、滋賀県湖南市立甲西北中学校・山口朋久先生の

「誰もができる 英語授業内多読 読める!楽しい!世界に!」です。具体的には、英語授業内に10分間の多読時間を設定した実践で、多読に用いた図書は英国の小学校で国語の教科書として使用されているオックスフォードリーディングツリー（ORT）です。ORTは図書館司書の協力のもと、図書館に常置され、授業での貸し出しも可能となっており、このような連携も評価されました。

本実践は、伝統的な精読への代替案として多読を取り入れたことが評価されたのではなく、研究目的が明確であることや授業内に多読を取り入れた独自性と多読が「読むこと」の指導の中に埋め込まれて、多彩な活動と組み合わされている点が評価されました。

最後に、中学校部門で奨励賞を受賞された、茨城県立竜ヶ崎第一高等学校・附属中学校・中山幸昭先生の「図形言語で歴史の授業に革命を!～コンセプトマップ(概念地図)で学ぶ中学歴史～」です。コンセプトマップとは、「歴史の大きな流れ」としての教科書の本文を関係性に基づき図として再構成したもので、作成者は授業者である教師の場合と、生徒が発表のために作成する場合があります。

実践の成果は主にアンケート結果を分析して行われており、興味深いのは、「分かりやすい」よりも「深い学び」のほうがコンセプトマップへの評価が高い点です。コンセプトマップを作成する際に「この時代の社会が解決すべき課題は何だろうか」を基底に据えているためであり、この辺りをきちんと主張すれば、本実践の価値が一層明確になると考えられます。

以上、全体の印象と、受賞された3つの論文について所感を述べました。ご紹介した3つの実践は、それぞれの教科・領域等において、全国の模範となる実践・研究であると思います。この度の受賞、誠にありがとうございました。

審査委員

松岡 敬明



この度、東書教育賞の論文審査に当たらせていただきました松岡敬明と申します。どうぞよろしくお願いたします。

まずは、今般受賞された皆様、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。ご多用な日々の教育活動の傍ら実践研究を進められ、それを論文にまとめられたご努力に対して敬意を表します。

私からは、中学校部門において最優秀賞を受賞された永田祐己先生、同じく中学校部門において奨励賞を受賞された中山幸昭先生、そして小学校部門において奨励賞を受賞された恒成尚江先生の論文に触れながら、お話しさせていただきたいと存じます。

永田先生は、栄養教諭として「集団での給食活動における個別最適な栄養摂取を目指した取組」という論題で研究を進められました。給食における「ご飯」の摂取量に着目し、生徒一人一人が摂取すべき適量を把握し、配膳時にその適量が盛り付けられることを目指した実践研究です。生徒の実態をしっかりと把握し、それをもとに研究主題を設定する姿勢は非常に実践的であり、生徒たちに科学的根拠を示しながら自身の摂取量について考えさせる手法は、主体的な学びを促す素晴らしいものです。

また、永田先生は日常的に授業を担当する立場ではないにもかかわらず、とても効果的な授業

を展開されている点も印象的です。日々、生徒たちとのコミュニケーションを大切にいらっしゃる姿が、容易に想像できます。

この取組を通じて、生徒たちは自分の食事内容や適量について主体的に考える機会を得たと考えられます。栄養に関する学びが実生活に直結することで、生徒たちの意識変革につながる点も高く評価されるべきです。これらは、栄養教諭としての職責を存分に果たした成果と言えるでしょう。

今後、フードロスなどに対する意識を生徒たちに促す取組も考えられるのではないのでしょうか。適切な摂取量を意識することは、フードロスの削減にもつながり、環境や社会への配慮を学ぶ機会ともなることでしょう。永田先生の研究は、食育のみならず持続可能な社会の実現にも貢献する可能性を秘めています。本研究がさらなる発展を遂げ、多くの学校で活用されることを期待しております。

続いて中山先生の研究についてお話しいたします。中山先生は、「図形言語で歴史の授業に革命を！～コンセプトマップ(概念地図)で学ぶ中学歴史～」という論題で研究を進められました。歴史の授業にコンセプトマップを活用した実践研究です。中学校における歴史の学習は、ややもすれば知識や記憶に偏りがちですが、コンセプトマップを活用することで、生徒の歴史理解を立体的かつ重層的に深める効果があると筆者は述べています。また、展開例における教師の問いかけが、単なる知識の確認ではなく、生徒に考えさせる設問として工夫されている点が非常に印象的です。このような問いかけは、生徒が歴史的事象の因果関係や背景を深く考えるきっかけとなり、学びを広げるものとなっています。

さらに、中山先生の授業を通じて、生徒たちはコンセプトマップの手法を身につけることで、今後、効果的な企画書やプレゼンテーション資料などを作成する力を獲得していくことが期待されます。この取組は、歴史学習の枠を超えた汎

用的なスキルの育成にもつながる点が素晴らしい
と思えました。益々のご活躍を期待しています。

最後に恒成先生の研究についてお話し
たいです。恒成先生は「教師主体でデザインする
生活単元学習の授業づくり研修」という論
題で研究を進められました。特別支援教育
の分野における論文ではありますが、本研
究は、児童・生徒への直接の指導に関す
るものではなく、教員育成に焦点を当て
た点にたいへん興味深いものがあります。
教員の研修内容や方法論を体系化し、特
別支援教育における教育の質を向上させ
るための大きな一歩であると言えるでし
ょう。教員の指導力向上は、児童・生徒
への教育効果に最も直接的に反映される
ものです。本研究は、問題意識が明確で
あり、課題解決に向けての取組姿勢がと
ても意欲的である点が高く評価できま
す。

個人研究となっていますが、校内体制
の整備や協力体制についても具体的に触
れられていると、全体像がより明確にな
り、他の学校においても応用可能性が
広がるのではないかと思います。益々
のご活躍を期待しています。

以上をもちまして、簡単ではありますが
私の講評とさせていただきます。